「黄金の夜明け」のまえに

大越孝太郎×
和嶋慎治・鈴木研一（人間椅子）

現在、本誌上で連載漫画「星にねがいを」を執筆中の大越孝太郎氏が人間椅子の3枚目のアルバム「黄金の夜明け」のジャケットイラストを手掛けました。

今回はそのCD発売を記念しまして、大越孝太郎氏と人間椅子の和嶋慎治氏、鈴木研一氏に世紀末を中心にお話をしていただいた。

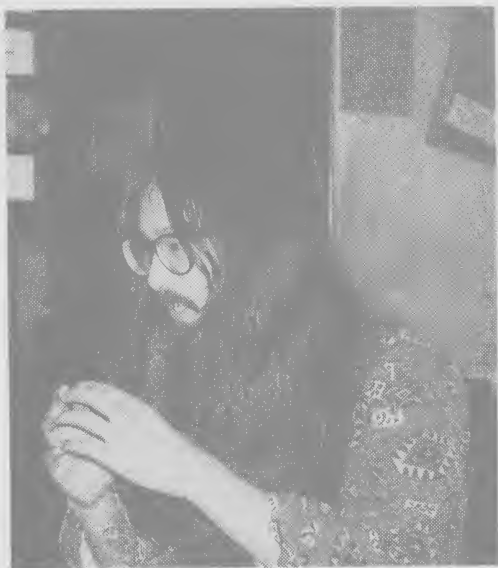
イメージして絵にしやすいんです。

——まず人間椅子の音楽と大越孝太郎さんの漫画に共通点のようなものがあると思うのですが、どのような所に共通なものを感じますか。

和嶋　最初ガロによく人間椅子を描いている漫画家の人がいるって聞いていて、見てみたら大越くんが載っていて。大正ロマン風な所とか自分達に近いような気がしてました。

大越　そうですか。僕、イカ天で最初に出て来た時から見ていたんですけど、音楽でも絵になる方々だなと思って絵に描かせていただいたんですよ。

鈴木　ネズミ男とか出て来て珍しい人がいるなーと思って（笑）。

——絵になるというのはどういうふうにですか。

大越　顔ですね。特に鈴木さんの顔が凄い好きなんです。顔つくってますか。

鈴木　ライブ中はメイクして目とか吊り上げているし、キッスのジーン＝シモンズとか好きだから成り切った気持ちでやっていますけどね。理想としては大越さんの「助けてくれー」っていう絶叫の男の絵とかあるでしょ、あの位の顔をしたいんだけどなかなかそうはならないですね。

——歌詞はどうですか。

大越　ききなれない固有名詞とか入ってますよね、それが好きで僕も知っている言葉もかなりあったのでスッと入って行きました。人間椅子は日本語でやっているから好きなんです。それで歌詞をそのままイメージして絵にしやすいんです。だからすぐにCDの絵も浮かんだんです。

和嶋　曲を作る時とか詞を書く時は、なにか情景を描いて書いてたりします。

大越　そうですね。僕、前から思っていたんですけど曲というのは漫画にすると絵なんです。そして詞というのはストーリーなんですね。

和嶋　特に僕らは小説みたいなストーリーをつけようとやってますね。

大越　漫画描く時に僕は絵から入るんです、最初にこういう場面という絵が頭にうかんで来て、それにいい話がつけられないかなっていうのが結構あるんです。

鈴木　じゃあ描いているうちに、描こうと思っている事と全然違うようになっていく事とかもあるんじゃないですか。

大越　全然変わって来ますよ。この場面だけを描きたいからこのストーリーを作ったというのもありますから。

和嶋　作家の人も書いているうちにいくらでも結末が変わっちゃうっていうね。

大越　最後が決まっているって話って作り易いですよね。僕は始まり方が結構うかんできちゃうからいつでも時間が掛かっちゃうんです。

鈴木　それは曲でも同じですよ、イントロ勝負って言う位だから（笑）。イントロがいい曲は必ず良く行くという。逆にサビから出来た曲っていうのは煮詰まるんだよな。イントロうかばねー、うかばねーって言って。結局は出来るんだけどそこまで行く時間が凄く長いですよね。

和嶋　書いているうちに空間が広がって行く瞬間というかトリップするというか、そういうのにまかせてやった方がいいのが出来るみたい。

大越　歌詞とかはほとんど本ですか。最近は本じゃ無くなって来ましたよね。

和嶋　やっぱり自分の言葉じゃなければ駄目だというのが出て来て。

鈴木　和嶋の歌詞ノートっていうのがあるんだけれど、それをペラペラ捲ってみると気違いの日記みたいになっていておかしいですよ（笑）。「なまけ者の俺はなんとかがなんとかする」とか。

和嶋　最近いいフレーズを思いついたんだよ「私とは私である事の3人称である」。

鈴木　キザだねちょっと（笑）。

和嶋　断片を書いておいてその中から合うやつを探して行くんです。

物理の恐さ。

――先程人間椅子の歌詞でイメージして絵を描くとあったのですが、具体的にどんな歌詞ですか。

大越　2枚目のアルバムの中に「非ユークリット幾何学」という歌詞があるじゃないですか、あれがもうグッと来ちゃって。

和嶋　平行線が交わってしまうという世界ですね。

大越　理屈が分からないですよね、どうして交わるのか。

鈴木　俺なんか歌っていても未だに分からないですよ（笑）。

大越　最近心霊とか幽霊よりも物理の恐さがグッと来ちゃって。心霊よりも血も涙も無い恐さってあるんですよ、物理って。

和嶋　そうなると神の意志というか、そういう所まで行っちゃうんじゃないですか。

大越　カミナリって最初は神様のお怒りだって言われていた時代もあったけど、今考えるとちゃんと説明出来るじゃないですか。電気とか天気とかでね。で、神様もその内に物理的なもので説明出来る様になっちゃうんじゃないかと思うんです。そんなに物理は詳しくはないんですけど。

和嶋　その支配する秩序みたいなものがあるかも知れない。

大越　人間椅子の歌詞はどのような方向に行くんでしょうか。

和嶋　オドロオドロだけだと非生産的というかそんな感じがするんです。だから2枚目からそれだけでは無くなって来て、むしろ理性では割り切れないものが今出て来ているからどうするのか、という意味で「非ユークリッド幾何学」とかは使ったんですけど――3枚目はそういう中にこれから進むべきカギがあるんじゃないかと、そういう感じで作りました。なんか、善と悪って凄くぴっちりと別けて、その中で皆んないい事をすれば救われるという、そういう安心の世界みたいなものがあるけど、それだけでは結局行き詰まっているような気がしたんです。祝福されない何か闇とか、皆んなが隠している部分とか忘れて来たものの中にこれからのカギがあるんじゃないかと思うんです。

大越　そうですね。

和嶋　「黄金の夜明け」という昔クローリーがいた黒魔術の団体があったんですよ。そこはモロそれをやろうとしたの、昔に還ろうというオカルト的世界というか、調和している宇宙というか、キリスト教と違う世界。

大越　黒魔術とキリストではそこの部分がどう違うんですか。

和嶋　キリスト教はそれがダメだと言うんで歴史を作ろうとした世界みたいです。キリストが生まれてそこから数えて二千年後にまたキリストが来て皆が救われるという。

大越　黒魔術というのはキリスト以前なんですか。

和嶋　そう、そこに戻ろうとしているみたい。

大越　ではまた「黄金の夜明け」が復活して、またその後にもキリスト教みたいなものが出て来るんですか。

和嶋　いや、ずっと続くはずだったけどう閉じないんです。キリスト教というのが始まっちゃってもキリストが生まれて年を数えるようになった途端今まで丸だったものが線になっちゃった。進歩しなければいけない世の中に二千年前からなってしまって、それを解決しなければいけない状態だなって。

大越　最近僕、たかだか人間だと思っちゃうんです。宗教というのも全部人間のやっている事だから。僕、本当に神はい

ないと思っていますから、なんか全部そういった事も人間がやって来た事だと思うんです。

鈴木 そのあたり唯物派と唯心派は意見合わないですよ。

大越 その辺のストレスがここに来て出て来ていると思うんです。宗教戦争というのはストレスが爆発したものじゃないですか。戦争が出来る時代ってあったけど、今は戦争出来無い時代ですよね。

和嶋 しちゃ終わりという。

大越 戦争をしないように、しないようにとしているけど、戦争出来無い時代でストレスは溜まるわけです、でも戦争は出来無い。戦争があれば結構人間ってストレス発散出来るんです、良くなろうと悪くなろうと結果は別としてね。

和嶋 一番直接的な革命の方法ですかね。

大越 そうなんです。それで今戦争が出来無いストレスはどのような形になるのかなって思うんです。一九九九年に何かがあるとしたらそれだと思うんです。

和嶋 キリストが再臨する時に一遍世の中を混とんの状態にして終わらすとか言われていて、確かにそのとおり来ているんじゃないかと思うときがあります。

大越 神の国の想像図とか極楽の絵とか地獄の絵も描きますよね、あれもやっぱり人間のやっている事だと思うんです。本当にそこに行けるかは別にして。その身もフタも無い事をするエネルギーってどこから来るんだろうと思うんです。なんでそんな事に一生を使い果たすのか、進んで十字架に張り付けになるとか良く判らないです。

和嶋 なんかまだ救われてないからじゃないの自分が。

大越 そうなんですかね。

和嶋 何かに思いを托すとか。

大越 神様って言っちゃうと早いんだけれどそういうエルネギーの源ってどこかにありますよね。偶然のなせる術とか奇跡とかあるじゃないですか、ああいうエネルギーってどこかにあると思うんです。あと何百年か何千年かかると思うんだけれど、いつか分る時が来ると思うんです。

和嶋 う〜ん。

大越 でも今はそれが分りかけているけれど否定する力の方が強いんです。例えば殺人事件があって物的証拠があればもう犯人だという事になるけど、あれは神霊が絡んで来ると全部ふっとんじゃうんです。超能力で殺せちゃったとしたら証拠がなにも無いですよね、それでその人無罪になっちゃうんです。だからそうさせないような力が働いているんですよね。宗教とか認めたくないというのは多分そうなんです。

和嶋 そういったものが可能とされてしまうからですか。

大越 六法全書を書き換えなきゃいけなくなるんです。

鈴木 書き換える時期なんじゃないの。

大越 それが来るんですかね。

和嶋 来るんじゃないかというか来てほしいなあ、個人的には。

大越 来たら面白いですよね。

和嶋 全部理論で割り切ろうとするように世界がなっちゃったよね。俺も良くは解らないんだけどそれはデカルトの懐疑主義から始まっているみたい。それでそれとは違う事をやろうとしたのがヒトラーみたいなんだな。でも、そういう割り切れない超能力とかを調和しようとしたのではなく、それだけの方向に行こうとした。人間のエモーション、霊的なものとかにもう一回戻るという。

大越 それは今回の「黄金の夜明け」と同じなんですか。

和嶋 違う、違う(笑)。それは違うと思ったから何か一緒にする方法は無いかと思ったんですアルバムでは。オカルトだけで行こうとするとヒトラーみたいに失敗すると思うんです。結果的に合理主義のアメリカとかに負けたからですね。

大越 でも、同盟国だった日本というのも結構恐かったですよね。

和嶋 イカレてるよね。

大越 あの当時の日本って嫌な言い方かも知れないけど好きなんです(笑)。やっ

楽観的でいいねぇ。

ている事が子供なんですよ、カエルのおなかをふくらましたらどうなるかっていうのと同じなんですよね。

大越　例えば世紀末の話に絞るとどうなると思いますか、何か来るとか（笑）予言するとしたら。

和嶋　何か、いきなり人間の考え方が変わってしまうような。

大越　僕もそう思います、でも隕石が降って来るとか、そういう事は無いでしょうね。

和嶋　人間の内面から変わるというか。

大越　そう、意識が変わると思うんです。

——具体的に言うと、どういう風にですか。

和嶋　うーん分かっていたらすぐに答えるんだけれど（笑）。

大越　良い方向には変わらないと思います。

和嶋　あっそう？

大越　多分、皆んな「どうなるんだろう」という恐怖を持つじゃないですか、そういうので精神が変わってしまえば絶対に。

和嶋　黒い大王が降ってくる、とかあったじゃない。あれは人間の不安や恐怖が形になっているのかも知れない。それと直面しなければいけない時代が来るのかもな。

鈴木　形って？

和嶋　化物みたいなのかなぁ（笑）。

鈴木　それ、真面目に思ってるの（笑）。

和嶋　ちょっと頭がオカシイかっ！（笑）。

——その化物みたいのが来た時に人間の意識が変わるんですか？

大越　それはあると思いますよ、その化物っていうのが、例えば本当の化物じゃない、隕石でもなくって戦争でもない、もう鏡を見ているような事かも知れない。

和嶋　なんとも言えないような気がする。ただ急に竜みたいなやつが来るとは思えない（笑）。

大越　隣りの人かも知れないって気もするんです、本当に身近な物のような気がする。

鈴木　それは「世紀末が来るのが怖い」と思うその心理がそうさせるんであってさ、気が付けば「あれっ、もう21世紀だ」って感覚で生きていれば何も無くて過ぎると思うけどな。

和嶋　そうノンベンダラリンとはいかないような気もするけど（笑）。

鈴木　周りの方から「世紀末だ、何かあるぞ」と仕込まれて、それに無理矢理合わせてさ、芸術なんかもアバンギャルドになったりするような感じがするんですけれどね。

大越　そうなったら、皆の意識がそういう方向に向いて行ってしまい、多分何かあると思うんです。

鈴木　でも、やっぱりノンベンダラリンと過ごすのがいいと思うんだけどなぁ（笑）

大越　周りに惑わされずに、自分をしっかり持っていないと乗り越えられないって気がするんです。

和嶋　不安がっていると、結局呑み込まれてしまうよね。

大越　そういう意味では、西成の暴動やロスの暴動って小規模のものかなって思うんです。あれがもっと大規模に行われたら恐いですよね。

和嶋　最近、そういう暴動とか凄く多いですよね、一週間レコーディングで篭っている間にも、外では何件も殺人事件があったりね。

鈴木　いろいろあるよね。チェコの民族闘争とか、タイもそう。ああいうので周

あと8年しかねえんだよ。

りの人がビビって、世紀末だって騒ぐんだよな。

大越 そう、それで関係無い人までやってみようかなって思っちゃう。

鈴木 でも自分達にしてみれば、世紀末に少しおかしくなった方が、歌詞がうかばない時になんかいいんだけどなぁ(笑)。

大越 その後まで生きていれば、凄い評価されるかも知れないし(笑)。

鈴木 しかもデタラメな歌詞書いといてさ、その通りなったら「予言者だ」とか言われちゃって(笑)。「このバンド、予言バンドだ」なんてさ(笑)。

和嶋 楽観的でいいねぇ(笑)。

大越 結構いろんな事言っといた方が得ですね。

鈴木 どれか当たるかも知れない。しかも具体的に言わないでボンヤリとね(笑)。

大越 予言者って結構そうかも知れませんね。

——例えば大越さんが考える理想の世紀末像はどんなものですか？

大越 自分の漫画の世界そのまま、と言うとヘンですけれど、ああいう絵のようになって欲しい。映画の未来のようになって欲しいんです。

和嶋 ああいう未来都市の感じ？

鈴木 それは暮らし易いという事で？

大越 暮しにくくてもいいんです、楽しければ。

——未来の建築物とか、そういうものに惹かれるのですか？

大越 どうなるか分らないけれど、ああいう街に住んでいたいという気がするんです。その位の時期にはもう宇宙にも行けると思うんです。民間人第一号とか言ってね。そうするとグッと変わると思うんです。だからその時代まで生きていたら、自分は宇宙に行ってみたいですね。

——そういう理想が今回の「星にねがいを」の舞台ともなっているわけですね。

大越 ええ、僕はいけなくても自分が生きているうちに行ける時代になっていて欲しいですね。

——和嶋さんはどう考えますか？

和嶋 凄くシンプルというか、単純なものになっていると思う。機械もあまり無くてさ。

大越 あっそうです。

和嶋 凄く薄っぺらな小さな物でやれてしまうというか。

鈴木 でもあと8年しかねえんだよ。

和嶋 うん、8年後では無理だけどさ、でも、宇宙人ってそういう世界だって言うでしょう、静寂が支配していてさ、お互いに尊重し合って、そういうのがいいかなあって(笑)。

鈴木 大越さんとか和嶋とか、それぞれ美しい理想があってもさ、それとは裏腹に現実は世の中はずっと平凡でさ。

和嶋 そのまま死んでゆくワケか(笑)。

——大越さん、先日世紀末には人間淘汰が起こると言っていましたよね。

大越 淘汰という言葉自体、本当はよく分からないんですけれど、何か減ると思うんですよ人口が。よけいな人は死んでしまう。

和嶋 危い!!(笑)。

——自然淘汰みたいな感じで死んでゆくという事ですか。

和嶋 エイズってモロそうかも、キャリアでも発病しない人が生き残って、発病

した人が死んでゆく、そんな冷酷な世界が待っているという気もするね。

大越　人間の中には安全装置がついていますよね。70年しか生きられない、絶対死ななきゃいけないという。だから良く出来たもんで人口が増えて来ればエイズのような安全装置が働いて、減らそうという力がね。

和嶋　エイズって猿から伝染ったんじゃなくて、人間のDNAの中に最初からそういうウィルスがあった、という説も出てますね。

大越　僕もそう思うんですよ。人間の精子の数が減っているというのもそうだと思うんです。うまく出来てますよね。

――でもそうして淘汰された時、意外と五体満足じゃ無い人間が生き延びている、という事もあるかも知れませんね。実際に人間の重心がズレて来ていて、このままだと立てなくなってしまうと言っている人もいますし。

和嶋　人間っていうのは、猿の胎児状態なんでしょ。それがそのまま成生した、だから限り無く退化に近づく系体らしいですよ。人間はこれからツルツルになってゆくかも知れないし。

鈴木　じゃ、人間は猿の白子みたいなもんだ（笑）。

和嶋　宇宙人の予想図ってみんな子供みたいだろ、ツルツルの。

鈴木　あれって何なんだろうね、宇宙人の絵って必ず頭がハゲてんだよな（笑）。

大越　映画に出て来る宇宙人はみんな人間の形をしているってバカにされてるけど、まず、惑星に生物が生まれるには、この重力で太陽からこの位置でっていう

いろんな条件があるでしょ。そういう所で人間みたいなものが生まれるとしたら、やっぱりこの形しか出来無いんですよね。指の数とかは違っていても二本足でね。凄く洗練された形だと思うんですよ。

和嶋 研ちゃん、いろんな形の宇宙人がいるって言ってたよな。

鈴木 いや、絶対にいるハズだよな。目が二つというような観念を覆すようなさ、全然違うヤツがね。

大越 昔、カナダかアメリカで出来たオパビニアという生物の化石があってね、それは目が五個付いているんですよ複眼でね。普通生物って、奇数という考えは無いんですよね、でも五個あるんです。そこで発見される化石って、そんなのばかりなんですよ、で、どうして滅んだのかも、どうして奇数なのかも分からないんですが、やっぱり適応出来なかったんですよね。まあ、理想とする宇宙人がいて欲しい、というのはあるんですけどね。

泣きたくなっちゃうんです。

大越 死ぬ事ってどう考えていますか、個人的に。

和嶋 昔は生まれ変わりとかは考えられなかったけれど…。

――大越さんはどうなんですか?

大越 僕も生まれ変わりたい、という希望はあるんですが、どうやらダメみたいですね、生まれ変われないですね。

――どうしてですか

大越 なんか、意識を残そうと考えるんですけど、それも駄目ですね。残っている記録が無いから。ただ生まれ変わりといっている人もいるけど。

和嶋 人間としてただ普通に生まれ変るのも変だと思うけれど、次のためのある一段階という気もするんだけどなぁ。

大越 だから、この世の世界が実はあの世の世界で、死んでからこの世界が本物の世界だ、という人もいるけれど、そんなの全然無いと思っちゃうんです。

鈴木 俺も無いと思うけどな。

大越 でもそれを考えると泣きたくなっちゃうんです(笑)。今描いている漫画が、ずっと描いてゆくとその方向に行くんです、生まれ変わりっていうのを本当に考えてみたいんです。誰かちゃんと実験して欲しいですよね…。あの、死にたくない、と思います?

和嶋 いや、死ぬのは次のためだな、と思えばそんなに恐くないですから。

大越 生まれ変わりがある、と考えるのは恐いっていうのがあるからですかね。

和嶋 裏返せばそういう事じゃないですかね。

大越 小学校の頃に「人間は必ず死ぬ」と分かる時が来るじゃないですか、あの時って凄く恐いじゃないですか。

和嶋 毎日そればっかり考えて(笑)。

大越 そうそう、僕なんかそれで母親にしがみついていた時期とかあったんです、恐くて。母親は「大丈夫よ」しか言わなくてね。でも僕はそれが今でも続いていてね、恐くて恐くて仕様がないんです。

鈴木 あと20年位生きたら「もう死んでもいいや」と思うんじゃないですかね。

大越 ああそうか、でも老人になればなる程、死ぬのが恐いっていう人もいますよね。

鈴木 ああそうですかねぇ。

大越 生きているうちに冷凍庫に入った人はまだ居ないんですけど、アメリカの方でいつか生まれ変わろうと思って死んでから冷凍になっている人っていますよね、多分僕もそうなると思うんです。

鈴木 でも生きているうちに冷凍にしないと意味が無いんじゃないですか。

大越 そう、出来るとすればそうなんですよね。「ルパン三世」の一番最初の映画でマモーが出て来て、クローン人間を作ってどんどん増やして行くって、あれも死にたくないっていう人が作ったんじゃないかと思って。そういう風に考えて、残そう残そうと考える人はいるんですよね、自分の記録を。

和嶋 それはある意味では本能じゃないの。

大越 ええ、だから僕は死ぬ時に自分の記録を書いて残して、自分はこんな人間だったってね。もし自分の生まれ変わりがあるんだとしたらそれを読んでくれる時が来るかなっと思って(笑)。そうすれば、俺の生まれ変わりかなって気が付いてくれると思うんです。もし生まれ変わるとしたら、まったく同じ行動をするかも知れないですよね。だから同じ人間に生まれ変わったら自分の記録を読んでくれると思うんです。

鈴木 でも、そういうのが今まで無かっ

た所を見ると、人が死ぬと人に生まれ変わらないんじゃないですか、きっと。

大越　それも考えますよ。

鈴木　原点に還ってアメーバーあたりからまた、ひとつひとつ登って行くんじゃないですか？

大越　また人間に来るまでに何億年もかかる。！

和嶋　それに、その生まれ変わりを決めるのは誰か？

大越　宗教っていうのは、その生まれ変わりの考え方を考え易くしますよね。輪廻転生とか、生まれ変わらなくても乗り移るとか、宗教に頼ってしまうと、そういうことって安心するんです。でも僕はそこで甘んじたくないんです。

和嶋　それはそうですよ。

大越　でも、本当に恐くなると、どこかに信心して生まれ変わりを信じた方が幸せなのかも知れないと思う時もあります。

鈴木　いい行いをすればまた人間に成れるっていう考え方は、犬より人の方がいい、という考え方だけれど、それがいいとは限らないと思うけれど。

大越　犬みるとさ、コイツより俺の方が幸わせだ、とか思わないもんね。

和嶋　思わない。

鈴木　俺、猫が寝てるのみていると、ああ猫の方がいいなぁ、と思うもの。

大越　でも犬を散歩させてね、犬がミミズなんか踏み付けたりするの見ていると「あ、ミミズより犬の方がいいな」と思うんですよね（笑）。

鈴木　そういう段階って調和しているんじゃないのかなぁ。

和嶋　いいとか悪いとかっていうもんじゃなくて、それだけのものなのかもしれない。

鈴木　大越さんがそう言うのも人間の考え方であってさ。

和嶋　犬は考えないもんなぁ、きっと（笑）。

宇野浩二読むと面白いですよ。

大越　和嶋さんは本とか沢山お読みになっていると思うんですけど一番好きというのはどうですか。

和嶋　日本人の小説しか読まないんだけど、「谷崎潤一郎とか好きだった。美とかそういうものだけを求めていった作家だけど。

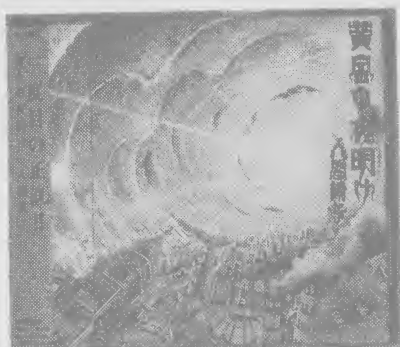
大越　自分の美意識だけで書いている、そういうの好きですね（笑）。

――大越さんはどうですか。

大越　僕も谷崎潤一郎好きですね、あとやっぱり坂口安吾。あと横溝正史とか江戸川乱歩も好きなんですけど、もう読んじゃったんですよね、それが最近凄く残念でね。

鈴木　少し残しておけば良かった（笑）。

大越　そう「パノラマ島綺譚」ってあるじゃないですか、あれ皆んなに面白い、面白いと言われて、ちょっとずつ読んでいるんです（笑）。面白いと分かっているから1頁づつ読むんです。

鈴木　それはありますよね、楽しいのは

㈱メルダック／税込定価 3000円

少しづつ味わおうというか。俺も「男はつらいよ」好きなんです、43巻まで出ていて見ようと思ったら一気に見れるんです、見たいんですけど見たら一生の楽しみが無くなる、と少しづつ見ているんです。

和嶋 ライフワークにしているの、寅さんを（笑）。

大越 友達とかにもまだ夢野久作とか読んでいない人がいるんです、読みたい、って言ってるんだけれど、まだ読まない方がいいよって（笑）。

和嶋 数が限りありますからね。

鈴木 それを継ぐ人とかあまり出て来てない。

大越 いないんですよね、本当に残念なんですけど。

和嶋 大正とか昭和初期で終っているんだよな、なんか。

大越 僕、江戸川乱歩の場合、全部好きというわけでは無くて探偵が登場する前というか、横溝正史も探偵が登場する前が面白かったんです。

鈴木 「鬼火」とかいいですよね。

大越 僕は「蠟人」とか好きですね。

和嶋 江戸川乱歩とか横溝正史の初期は宇野浩二の文体を真似したんですよ、作風とかも、だから宇野浩二読むと面白いですよ、貧乏な書生みたいのが出て来て、日常からつまらなくて……というの、あれは宇野浩二という人が最初にやったの。

鈴木 横溝正史は乱歩の真似したんじゃないの？

和嶋 あの人も宇野浩二好きだったみたいで「蔵の中」って同じタイトルの話があるよ。

——大越さんの漫画で映画のキャラクターが出て来る事があると思うんですけど、映画から受ける影響も大きいのですか。

大越 昔は本からだったんですけど最近は、映画から直接入って来るのが楽なんです。リドリー・スコットとか好きで、そのまま場面とか構図描いちゃう事もありますよ（笑）。昨年「パノラマ境綺譚」描いた時の人がブァーといる所なんかほとんど「ブレードランナー」ですよ。

——香港とか亜細亜の変な所。

大越 そう、これからは亜細亜がグッと来ると思うんですよ。それに亜細亜は恐いですしね。

——では最後に今後の活動についてお話下さい。

大越 とにかく顔が好きなんですよ僕、だから色々な人の顔を描きたいです。あと物、特に電話とかTVとか好きなんですけど、そういった物にも顔があると思うんです。顔というのは風貌の「貌」ってあるじゃないですか、あの貌(かお)を意識して描いていきたいですね、そうした方が読んでいただく方にも印象が残ると思うんです。内容では、ガロに限って言えば生まれ変わりをやりたいですね、それでやっぱり物質に拘わりたいです。

——和嶋さんはどうですか。

和嶋 やっぱり、基本的にバンドですから日本語のロックをちゃんとやりたいなと思いますけど。結局ロックってなんだかんだ言ってもまだ生まれてない感じで、過激な事をやってもマイナーとして片づけられてしまうし、売れるものをやるとロックからどんどん離れていって歌謡曲に限りなく近づいていって、名前だけのバンドになってしまうし。内容としてはメッセージっていうのはあるんですけど、これこれこうだと決め付けるんじゃなくて、同じ世代の人にこういう風に考えてみたらどうなるのかなっていうのをやりたいです。

——鈴木さんはどうですか。

鈴木 僕は長くバンドを続けたいですね、体弱いですから、健康に気を付けるというのが一番のテーマですね、最近。もうあちこち体がいたんでますからそれを気遣いたいと思います（笑）。

大越 もし今後一緒に仕事が出来るとしたら、僕、生涯の夢で映画を一本撮りたいんです。その時に何か出来るといいですよね。

鈴木 生首の役なら得意ですよ（笑）。

文責・編集部
1992年6月1日
高円寺「七つ森」にて

REMIX

Nu Era Music